

古文書倶楽部

【発行】

秋田県公文書館
2012.9
第49号

アーカイブズコースは、十一月二、九、十六、二十三日のいずれも金曜日に開催します。詳細は、ホームページや開催要項ちらしをご覧ください。ご来館や電話でのお申し込みもできます。

県政映画上映会のご報告とお知らせ

「県政映画」は、県が昭和三十年から制作し、県内各地の映画館で本編映画の幕あいに上映されていた、いわば「秋田のニュース映画」です。公文書館では所蔵する県政映画の中から、ノスタルジーあふれる昭和三十年代の作品をスクリーンでご鑑賞いただく上映会を開催しています。

去る八月二十六日（日）、今年度第一回



目の県政映画上映会を開催しました。厳しい残暑にもかかわらず、午前午後合わせて八十七名の方々にご来場いただきました。ロンドンオリンピックにちなみ、「秋田とスポーツ」に関する話題をはじめとした作品を上映しましたが、アンケートの結果、能代市出身の体操選手、小野喬さんが登場する「小野選手晴れの郷土入り」の人氣が最も高かったようです。

次回の開催日は、十一月三日（土）文化の日です。皆様のご来場をお待ちしています。

○日時 十一月三日（土）文化の日

一回目上映 午前十一時～十二時
二回目上映 午後 二時～ 三時
○会場 秋田県公文書館 三階 多目的ホール

【木村裕久】

クニマス人工孵化の事始め

～平成二十四年度公文書館講座

アーカイブズコース第一回より～

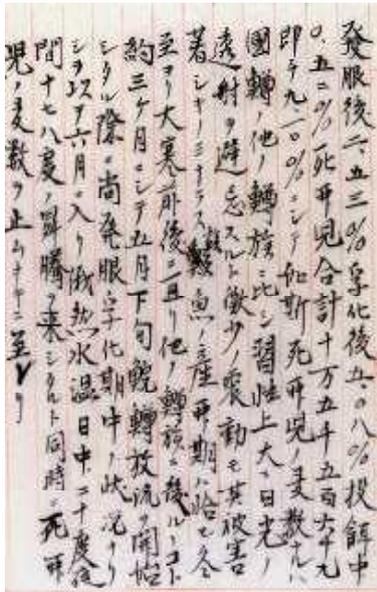
十一月から公文書館講座のアーカイブズコースが始まります。そこで今回は、十一月二日の第一回「戦前の県水産試験場のクニマス養殖」から前半のハイライト部分を紹介しましょう。

明治四十年八月、農商務省は秋田県を指定して鱒族養殖試験事業を命じ、産業試験費国庫補助法による補助金三百円を交付しました。明治三十九～四十二年「水産試験場一件書類」（九三〇一〇三―〇七一七六）には、田沢湖で実施された試験事業の経過が記録されています。

（2012年9月）

県水産試験場は当初、十和田湖の和井内貞行の養魚場から鮭鱒（ビワマス）卵を分与してもらい田沢湖孵化場で孵化させ、稚魚を田沢湖の他、館次沼（現・北秋田市阿仁荒瀬）、田螺沼（現・湯沢市高松）、柝倉沼（同皆瀬）に放流する計画でした。明治三十八年に和井内がヒメマスの養魚に成功し事業を拡大した後、十和田湖は各地への鱒卵供給地になっていました。しかし四十年には十和田湖の鱒類が不漁で、県水産試験場は鮭鱒卵を予定した三十万粒の内十五万粒しか入手できず、やむなく不足分を田沢湖のクニマス卵で補充することにしました。

田沢湖孵化場では、明治四十一年二月から三月にかけて、クニマスの親魚から十一万五千二百粒を採卵しました。卵は孵化場の水槽で五月末から六月末にかけて孵化しました。しかし孵化の前後で、卵と稚魚合わせて十万五千五百余が死ぬ結果となりました。九割以上という大量死の原因は、クニマスの習性が他の鱒族に比べて日光の直射を嫌う上、微少な振動でも衰弱してしまうためと分析されています。さらにビワマスは夏前の五月下旬に放流されましたが、クニマスの産卵期及び孵化期は他の鱒族より遅く、孵化の最中である六月中、暑さで水槽の温度が上昇したことも大量死に影響しました。



結局、生き残ったクニマスの稚魚九千六百尾余は他の湖沼に放流するには数が少な過ぎたため、全て田沢湖に放流されました。再び田沢湖でクニマスが人工孵化され、山梨県西湖や本栖湖に卵を分与できるほど増えたのは昭和に入ってからのことです。

【柴田知彰】

古文書 こぼればなし

秋田藩の国産

原料供給地型の秋田藩の物流

今ではアメリカに次ぐ世界の経済大国の一つとされる日本。一ドル七八円前後といった為替レートは、私の少年時代の一ドル三〇〇円台に比べれば物凄い成長と言えましょう。

さて、今回のテーマは「国産」ですが、今日では必ずメイド・イン・ジャパン。しかし古文書となれば、話は鎖国時代に遡りますね。当時は、御国とは藩を指す場合が普通ですから、ここでは秋田藩の代表的産物ないしはその候補生として挙げるものが出来そうなものを、当館秘蔵(?)の『経済秘録』(混架538-8)記載の領外移出物よりこぼしてみましよう。

表1は、文化期の秋田藩の領外移出品を抜き出したものですが、一位が米、二位が鉱産物、四位が畠作物、六位が材木でこれら四品目の合計が、実に八八%を占めるのです。このデータは秋田藩が持つ付加価値の少ない原料供給型とでも言うべき経済的特質を明示していると言えましょう。ただし三位に細工物、五位に漁肥料がランクされていることは、わずかながらも新しい商品開発への息吹が感じられる、細工物の中でトップを占めるのが絹糸であることは、藩の殖産政策が効果を示ははじめていると見ていいでしょう。それにしても、この材木移出の不振ぶりには驚かされま

表1 文化年中秋田藩領外移出調べ

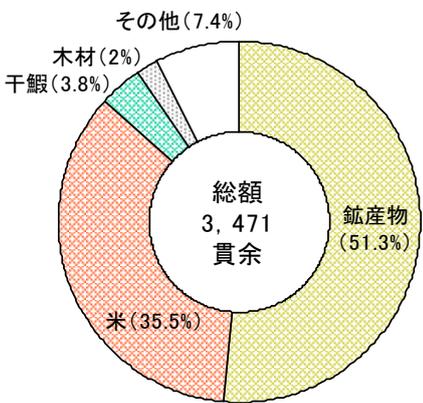
順位	移出物	積み出し場所	移出高 (銀換算)	百分比
1位	米	土崎港・能代港	5,950貫 112目	62.2%
2位	鉱産物	能代港の分	1,782貫 640目	18.6%
3位	細工物	陸上諸境口・港	811貫 910目	8.5%
4位	畠産物	土崎港・能代港	622貫 314目	6.5%
5位	魚肥	能代港	133貫 021目	1.4%
6位	材木	能代材木方の分	66貫 872目	0.7%
	その他	土崎港・能代港	195貫 863目	2.0%
総計			9,562貫 732目	

で、これを比較すれば両湊の後背地の産業構造の特質を知ることができます。

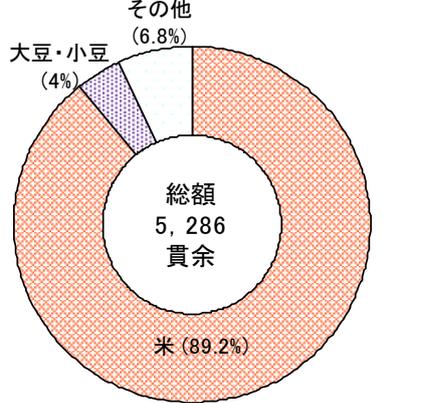
一目瞭然なのは、土崎湊では米、能代湊では鉱産物の占める位置の大きさです。米は、藩の穀倉地帯とも言える雄・平・仙三郡の米を雄物川で土崎湊に運び日本海海運で領外へ移出したことを示し、その数値は能代湊と合わせると米こそが秋田を代表する産物であったことを示します。他方、能代湊の鉱産物ですが、これは阿仁銅山の鉱産物が米代川の川下げによつて能代湊に集荷され、長崎御用銅として日本海海運によつて南下し、長崎からオランダを通じて海外へ輸出されていたのですが、その額からして藩北部の代表的産業であったことが分かります。

江政光が、その後段で述べたと言われる「山ノ衰えは国の衰えなり」の気配が漂いますね。次に表2の円グラフですが、これもまた『同書』からこぼれて来た能代湊と土崎湊の移出品

表2 近世後期能代湊と土崎湊の移出品



〔能代湊〕
文化5~7年(1808~1810)の平均額
(銀換算)



〔土崎湊〕
享和3年(1803)、文化2年(1805)
文化7年(1810)の平均額 (同)

中田沼意次の英断で取りやめになりました。長崎貿易の日本輸出品の代表は銅で、阿仁(秋田)、尾去沢(南部)、別子(伊予)銅山産出銅が長崎御用銅として、これはそのものずばりメイド・イン・ジャパンの花形製品として東インド会社などに輸出されていました。こうしてみると、江戸中期の秋田の代表的な国産は米は別格として、鉱産物、そして明治十年(一八七七)発行の農業書では秋田県特有農産物の一位を占めている繭・蚕が候補生として挙げられているのです。

【渡部紘一】